

**文庫あれこれ**◆Nさんが昨朝の伊豆新聞を届けてくれました。伊豆芸文欄・川柳の部に「古希ながらキャリアアップの資格取り」が。会員の金子さん作です。前向きな生き方にエール♥金子さんはじめ、何人もの方が、短歌・俳句と掲載されて、すごいなと。いいですねえ。私も一句…出てきません、とほほ。◆ここに住む人の芸術への熱い想いを素晴らしく思うときりですが、今回の中西さんのほか、Fさん、Mさんは大阪まで北斎・応為父娘の画展を観に行ったそうです。◆ドラマで見てから、応為の光と影のりなず画が忘れられません。コピペをしようとしたら、当方の腕では、残念ながら不可。◆応為についてご存じない方は、浅井まかて著『眩(くら)ら』をお読みください。◆観たい映画も多々あれど、忙しさに紛れ、上映期間が過ぎゆき残念。◆そう言えば、紅葉の美しさも今年は味わっていません。右下の画像は、京都桐尾高山寺の山門の紅葉です。鳥獣戯画を見にいった晩秋、雪の降りしきる年の初め、ひとりお部屋から広がる世界を眺めた若い日がありました。◆話は飛びますが、文庫のほとんどの皆さんは、語りや朗読なんてプロに任せておけばいい、とお思いのようです。でも語ってみたい人間は聞き手を得て、その醍醐味が忘れられないものになります。◆私が物語ることに心を惹かれたのは、幼い時に聴いたNHKの「私の本棚」でした。榎村治子の淡々とした、突き放すようなその朗読は私の心に沁みわたり、私も大きくなったらこんなふうになる心に物語りを伝える人になりたいと思いました。(今月Nさん寄贈の中江有里の『わたしの本棚』も別の意味で楽しみ)◆長じて、子どもやおとなに昔話や物語を語ることをしていますが、一昨日どうしても語りたお話『スノーグース』(ギャリコ作)を某文学館で語りました。長い日あたたかたてきたにも関わらず、ひどい出来でしたが、少女期から好きだった『ジェイン・エア』や『嵐が丘』に繋がる陰のある秘められた一筋の愛に 70 過ぎてても懂れます。どんより曇った朝空を見て思い出します。◆耳から、目から読書は心に様々なものを残してゆきますね。◆姫沙羅も葉を落としました。大島がほっと見えます。冬の訪れも間近。お風邪召しませんよう。◆今月も新刊、寄贈本、面白いものありますよ。(西村)

★開館日は通常日  
第3日曜と前日の土曜です★

2017

◆12月も通常16日(土)、17日(日)の両日  
**17日午前はクリスマスお楽しみ会**  
参加する人は、プレゼント(300円くらい)用意してね。今年もおはなしきいて、歌って、遊んで、文庫のクリスマス年越しをしましょ。

2018

◆1月は通常20日(土)、21日(日)の両日  
◆2月は通常17日(土)、18日(日)の両日  
◆3月は通常17日(土)、18日(日)の両日

文庫の時間

土曜日は14:00～17:00

日曜日は10:00～15:00

☆毎月開館日の日曜には、10:30～11:30

子どものための小さなおはなし会があります。

★おはなし沙羅の勉強会

毎月開館土曜日11:00～13:00

よみかかせの練習・本選の勉強にもどうぞ!



沙羅の樹文庫 0557-51-3737  
<http://www.saranokibunko.com>

沙羅の樹文庫だより

オリンピック開催まであと1000日、の記念に?  
皇居を前に、毎日新聞社面に貼られた参加国の国旗。



2017.11.5(毎週日曜、皇居の周りをジョギングする犬撮影)

## 朝のパン

毎朝

太陽が地平線から顔を出すように

パンが

鉄板の上から顔を出します。

どちらにも

火が燃えています。

私のいのちの

燃える思いは

どこからせり上がってくるのでしょうか。

いちにちのはじめにパンを

指先でちぎって口にはこぶ

大切な儀式を

「日常」と申します。

やがて

屋根という屋根の下から顔を出す

こんがりとおたかひものは

にんげん

です。

(石垣りん「空をかついで」の中から)

## 17年11月に読んだ本の感想

11.16日 by 森林浴

『浮世の画家』カズオ・イシグロ著 飛田茂  
雄訳 早川書房刊 2010年11月 第2刷

著者 カズオ・イシグロは、2017年度のノーベル文学賞を受賞した英国籍の日本生まれの作家。63歳。お借りした本は2010年11月に第2版が出版された7年前の文庫本で、私は最近目が弱って来たので文庫本だとちょっと困ったが、ノーベル文学賞以来この人の著書は本屋でも奪い合いになったと言うことであるらしい。この本はウィット・ブレット賞受賞。原文は英語で、舞台は太平洋戦争後の日本、主人公は画家。

全体が1948年10月、1949年4月、1949年11月、1950年6月、の4部に分かれている。

主人公の小野益次は、社会的に高く認められた画家で妻に先立たれて、娘が二人、姉はもう結婚して10歳の男の子がいる、妹は20歳台の後半で未婚、主人公の大きな関心は妹の良夫探し。妹の結婚の心配や姉の元気な男児のことが長々と出て来るが、この小説の主題は前の戦争の時の戦争協力への悔恨や、基本的な生き方としての社会問題への貢献不足などへの反省であるようだ。肝心の何をどのように描いていたのかという「絵描き」についてはさっぱり具体的ではない。どうも彼が活躍した絵の教室の師は本の表紙になっている浮世絵みたいな絵を主題にしていたらしい。つまり「浮世の画家」なのだろう。

全体として、この本を読んで、なにかすっきりしないもの、まどろっこしいものが残った。

末尾に添えられた作家小野正嗣氏の批評が的確に言う。「事実、小野(益次)は芸術感から言葉使い、

仕草に至るまで、自分が森山のコピーであること意識している。——これは、自分は自分ではない、影でしかないのだと言っているのに等しい。」  
(註—あもなく森山=小野の絵の師匠)

## 読む楽しみを～北の国から⑤ 壺子・紀

『動的平衡 新版』(福岡伸一著 小学館新書 2017)

## —生命は時計仕掛けじゃない—

初版は2009年に木楽舎から出版されたものです。小学館新書から再び出版するにあたり、最近、急速に進化した生命科学研究最前線の状況(特に、再生医療の切り札として登場したES細胞や2012年に山中伸弥教授がノーベル生理学・医学賞を受賞したiPS細胞についての批判的考察)、大騒動となったスタップ細胞についてなど、著者が再生医療のことをどう見ているのか追加加筆されていて興味深い内容です。

実は『動的平衡』を今回はじめて読みました。そしてその面白さにびっくりしました。理系の本ですが文系の頭でも十分に理解できました。

この本の肝は「生命とは何か」についての基本的な考え方です。「動的平衡」とは、合成と分解、酸化と還元、切断と結合など、相矛盾する逆反応が絶えず繰り返されることによって、秩序が維持され、更新されている状況を指す生物学用語で、生命を生命たらしめるもっとも重要な特性だと考えるものである」と新書版のあとがきにあります。

37兆個もある人間の細胞は、食物からとる2万数千種類のタンパク質によりたえず壊され作られ新しく入れ替わっているらしいのですが、では、記憶をつかさどる脳細胞はどうなのか。それは一度完成すると増殖したり再生することはほとんどない

ようですが、脳細胞を構成している分子は高速で変転している、リフォームが繰り返されているようです。「ある特定の記憶は特別の分子の形をとって海馬のなかにある脳細胞に溜められる」というのはウソであり、「たえず入れ替わる生体分子は常に「合成」と「分解」の流れの中にありますから、記憶が分子によって保持されることはない」のだそうです。では、古い細胞の中にある分子が壊されても、記憶が維持されるのは、いったいどういうわけでしょう。それはシナプスの連繋の技と脳内の情報伝達物質ペプチドという分子によって記憶は保持されるようです。

今回加筆された再生医療について結論的にいうと、臓器移植をとってみて今のところ、決定的に有効といえるほどの延命治療にはなっていないし、ES細胞にしても遺伝子組み換え技術にしても、どれも期待されたほどではない、というのが著者の見解です。それは「動的平衡」としての生命を機械論的に操作するという営為の可能性を証明しているように思えてならない」と記しています。人間は機械のパーツのように簡単に取り換えられるものではない。思いもよらないくらゐに生命の中に仕込まれていて細胞を取り換えたぐらゐでは長生きなどできないよ、ということでしょうか。

動的平衡からみた人間の死とは、合成よりも破壊が蓄積して秩序を保てなくなる時がくる。「摩擦し、酸化し、ミスが蓄積し、やがて障害が起こる、それが個体の死であるとのこと。なんだか妙に納得できます。以前から疑問に思っていた、カラーゲン添加食品やヒアルロン酸を含んだ化粧品は本当に若返りに効果があるのか、などの話も詳しく解説してありますので、こういう知識があれば変な広告に騙されることはないなあ、と感じました。

## 17年11月に入った子どもの本

### 絵本

『そらの100かいだてのいえ』（いわいとしお作 偕成社 2017）ID12573  
 『うみの100かいだてのいえ』（いわいとしお作 偕成社 2017）ID12574  
 『エンリケ、えほんをつくる』（リニエルス作 宇野和美訳 ほるぷ出版 2017）ID12572  
 『森のおくから一むかし、カナダであったほんとうのはなし』（レベッカ・ポンド作 もりうちすみこ訳 ゴブリン書房 2017）ID12578  
 『さるとかに』（神沢利子文 赤羽末吉 BL 出版 2017）ID12575※昔話絵本

### よみもの

『サラとピンキー ヒマラヤへ行く』（富安陽子作・絵 講談社 2017）ID12577

### 寄贈

『きみはダックス先生がきらいか』（灰谷健次郎さく 大日本図書）ID12579  
 『モモ MOMO の本』（岩波書店編集部 1987）ID12581※改めてエンデの『モモ』と。  
 『おばあちゃんだいすき』（葉祥明絵と文 至光社）ID12580



ID17247

『こんな老い方もある』（佐藤愛子著 角川新書 2017）ID17263

### 寄贈

ありがとうございます。

『わたしの本棚』（中江有里著 PHP 研究所 2017）ID9733

『幼き日の街角』（花沢徳衛著 新日本出版社）ID9725

『世界の子どもたちは いま』（田沼武能写真 形象社 1979）ID9726※『世界の子どもたち』（ほるぷ出版 2011）ID1889と併せて見てください。

『戦争—そのイメージ』（ロバート・キャパ写真・著 井上清一訳 ダヴィッド社 1974）ID9727

『黄色い手帖』（三岸節子著 求龍堂）ID9728

『窓ぎわのトットちゃん』（黒柳徹子著 講談社）ID9729※今、テレビでやっていますね。振り返ってお読みあれ!

『マイ・フレンズ』（黒柳徹子著 新潮社）ID9730  
 『女優杉村春子』（大笹吉雄著 集英社 1995）ID9731※最近出た『わすれられないひと杉村春子』ID17140と併せて読まれたし。

### 寄贈（文庫）

『食品サンプルの誕生』（野瀬泰申著 ちくま文庫 2017）ID9734

『浅き夢みし』（佐伯泰英著 光文社時代小説文庫 2017）ID9732

## 17年11月に入ったおとなの本

### フィクション

『たゆたえども沈まず』（原田マハ著 幻冬舎 2017）ID17253

『千の扉』（柴崎友香著 中央公論新社 2017）ID17256

『ルビンの壺が割れた』（宿野かほる著 新潮社 2017）ID17257

『銀河鉄道の父』（門井慶喜著 講談社 2017）ID17258

『きょうの日は、さようなら』（石田香織著 河出書房新社 2017）ID17248

『彼の娘』（飴屋法水著 文芸春秋 2017）ID17254

『神秘大通り 上』（ジョン・アーヴィング著 小竹由美子訳 新潮社 2017）ID17241

『神秘大通り 下』（ジョン・アーヴィング著 小竹由美子訳 新潮社 2017）ID17242

『私たちの星で』（梨木香歩×師岡カリマ・エルサムニー著 岩波書店 2017）ID17243

『ポーラスター① グハラ覚醒』（海堂尊著 文芸春秋 2016）ID17251

『ポーラスター② グハラ漂流』（海堂尊著 文芸春秋 2017）ID17252

『ホワイトハウスのピアニスト』（ナイジェル・クリフ著 白水社 2017）ID17250

『私にはいなかった祖父母の歴史—ある調査』（イヴァン・ジャブロンカ著 田所光男訳 名古屋大学出版会 2017）ID17244

『人生の役に立つ聖書の名言』（佐藤優著 講談社 2017）ID17245

### エッセイ・評論 ほか

『多田富雄コレクション4 死者との対話【能の現代性】』（多田富雄著 藤原書店 2017）ID17260

『ふたりからひとり—ときをためる暮らし それから』（つばた英子×つばたしゅういち著 自然食通信社 2016）ID17261

『故旧哀傷—私が出会った人々』（中村稔著 青土社 2017）ID17259

『捨て猫に拾われた男—猫背の背中に教えられた生き方のヒント』（梅田悟司著 日本経済新聞社 2017）ID17262

### 文庫

『大貧帳』（内田百閒著 中公文庫 2017）ID172164

『銀河鉄道の彼方に』（高橋源一郎著 集英社文庫 2017）ID172165

『知的な老い方』（外山滋比古著 大和書房 2017）ID17246

### 新書

『老いの僥倖』（曾野綾子著 幻冬舎新書 2017）

### 伊豆・高原・便り—外伝（2017 晩秋編）

10月末に能登に行ってきました。前から行きたいと思いつけていた「能登演劇堂」に仲代達矢のお芝居を観に行ったのです。テレビでロングランをやっていることを知りすぐにチケットを申し込みました。半年前から売り出していたチケットはもう完売に近く、B席しか残っていませんでしたが、小さな、600席ほどの劇場なので「まあいいか」とすぐに決めました。周りにちょっと声をかけましたが、のってきてくれる人はなく、夫に付き合ってもらうことに。その代わりに、来年1月には彼の趣味の「小曾根真」（ラブソディ・イン・ブルー）のピアノに付き合います。お芝居は、プレヒトの「肝っ玉おっかあと子どもたち」という反戦をうたったもの。84才の仲代達矢は、スタミナ切れを思わせましたが、演劇堂を見られて良かったです。舞台奥の扉の向こうには、能登の自然が広がっていて、幕が上がった最初の場面では、大砲の火が見え、奥から兵士たちが大勢走ってきました。3時半という開演時間には、まだ半分日が差して、舞台奥は明るいのです。それが、最期は暗い夜の中。外の冷たい空気が、客席にまで流れ込んできました。戦争の場面、たちと市民。仲代亡き後の維持が大変だろうと思いました。

翌日は和倉温泉にある、「辻口博啓」の「博物館」に。おいしいケーキに目がない私は選ぶのに困りました。地元の材料を使っているというかわいい、きれいなケーキを、海見える喫茶コーナーでいただきました。

行きは北陸新幹線「かがやき」が取れたのですが、帰りは「はくたか」でした。平日なのに金沢行きは混んでいました。新幹線の中で夫はずっと読書。集中力も視力も衰えつつある私は、持って行った本を1行も読めませんでした。ああ・・・。

私が好きなテレビ番組に中江有里のブックレビューがあります。NHKのひるまえほっとという中で月に1回あるのです。穏やかな語り口が好きなのです。思いがけない本に出会います。今回その番組の中で中江有里の新刊が出たことを知りさっそく買って読みました。「わたしの本棚」（PHP 研究所・2017刊）人生の節目節目に出会った本について、読みたいと思いつつ読めてない本、面白そうな読んでみたい本。前向きに進む姿勢はいいなあと思います。

（中西景子）

『膠着』（今野敏著 中公文庫）ID9715

『いい言葉は、いい人生をつくる』（斎藤茂太著 成美文庫）ID9716

『つゆのひぬま』（山本周五郎著 新潮文庫）ID9717

『大炊介始末』（山本周五郎著 新潮文庫）ID9718

『小僧の神様 城の崎にて』（志賀直哉著 新潮文庫）ID9720

『フラーとゾーイー』（J.D.サリンジャー著 野崎孝訳 新潮文庫）ID9721

『大工よ、屋根の梁を高く上げよ シーモア—序章』（J.D.サリンジャー著 野崎孝・井上謙治訳 新潮文庫）ID9722

『光あるうち光の中を歩め』（トルストイ著 原久一郎訳 新潮文庫）ID9723

『ハツカネズミと人間』（スタインバック著 大浦暁生訳 新潮文庫）ID9724

『続あしながおじさん』（J・ウェブスター著 松本恵子訳 新潮文庫）ID9719